
死の島

freak

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の島

【Nコード】

N9616H

【作者名】

freak

【あらすじ】

今度は真面目に小説書くことにしました。

カミール1日目10時

カミールはこの島に遊びに来ていた。

しかし、ここには遊園地などはない。

目立つものは最近できた大きなモールのみ。

カミールは自分でも何故ここに来たのか不思議でいた。

とりあえず適当にうろうろしているとうつ伏せになって倒れている人がいた。

思わず駆け寄り声をかけてみるも返事がない。

「大丈夫ですかー!!」

と大声で叫ぶとやっときづいたのかゆっくり立ち上がりこちらを見してきた。

「大丈夫そうですね」

そういつてまだどこかへ行こうとすると

「うろう…」

何かしゃつべたようだ。

いやどちらかというと言ひ声みいだった。

その男は近寄ると首筋を噛んできた。

激痛がはしると思わず振りほどいた。

勢いあまってその男はまた地面に倒れた。

「どうなっているんだ…」

そうつぶやきとりあえずバックに入っている絆創膏で傷口をとめた
またうろうろしているとまた唸り声が聞こえた。

しかも今度は複数。

「こんなところこなければよかった」

そうつぶやき街を観光することにした。

青木雄二 1日目10時

日本人である青木雄二もここに観光に来ていた。

今日は1泊した2日目今日の昼ごろ帰ろうとしていた。

とりあえずモールへ行ってみることにした。

このモールは結構大きいらしい。

ここでは拳銃も売っているらしい。

さすがアメリカだ。

モールにつくも人気がない。

その店長ばい人が慌てて出てきて

「君のんきになにやってるのかね」

正直なんのかとかわからなかった

「なんのことですか？」

「テレビみてないのか：では簡単に言うとは暴徒が人を襲うらしいだから避難しているだ」

「そうなんですか」

その後軽く会話しモールをでた。

しかし外は唸り声が：

とりあえずどこに避難すればいいかわからない。

人を見つけたので声をかけてみるも返事がない。

「酔っ払いかふらついてるし」

そう呟いた。

ゆっくり酔っ払いばい男がちかづいてきた。

よくみると左目が無い。

それに驚き全力で逃げた。

気がつくとまたモールの前にいた。

サイフが落ちてしまった。

それを拾おうとすると光るものがあつた。

拳銃だ日光で光っていた。

「しかしだれがこんなものを…まさかモールの店長」
でもあの人はやさしそうだった。

とても拳銃などもちそうにない。

拳銃なんて物騒な物使ったこともないし使いたくもない。
なのでそのままだいていくことにした。

立ち去ろうとすると暴徒がいた。

拳銃を手に取りゆっくり向かってくる暴徒に向けた。

「と、止まれ」

そんなこと無視しそのまま近寄ってきた。

思わず引き金を引いてしまい見事頭に命中。

暴徒はそのまま倒れこんだ。動きそうにない。

「ひ、人を殺した」

焦り拳銃を投げ捨て全力でまた走った

トム 1日目10時

トムはモールの店長をしていた。

出勤前にテレビを見るこれがトムの日課だ。

いつもはあまり見ないニュースを見ていると。

暴徒が人を襲う

このことばかりやっている。

チャンネルを変えてみてもこればかりだ。

世の中物騒になったもんだ。

そんなこと思っている

場所はこの島のような。

避難場所は船着場のようだ。

普通ならそう遠い距離ではない。

しかし車を修理にだしている今はとても遠く感じる。

とりあえずモールに寄って何か役に立ちそうなものをもって行くことにした。

モールまで行くととりあえず役に立ちそうな銃などを持って行くことにした。

モールからでようとすると思えない男がいた。

会話を交えていくと暴徒の騒ぎは知らないようだ。

早く行きたいので急いで出た。

モールから出てしばらくたって銃がないことに気づいた。

「暴徒がきたら脅しにでも使えろと思ったのに」

そう呟くとタイミング悪く暴徒が

しかしこの暴徒遅い簡単に逃げれる。

歩いているも追いつかれないくらいだ。

逃げているうち狭い路地にはいった。

知性があるのか偶然なのか狭い中で挟み撃ちにされた。

落ちている鉄パイプで殴ってみることにした。

突くようにやったが効いていそうにいない。
頭を思いっきり殴ってみた。

今度は効いたらしく地面へ倒れこんだ。

その隙に逃げた逃げ出した。

この場合正当防衛になるはず。

そう思いながら走り続ける。

しばらくたってさっき襲ってきたのは暴徒ではなく酔っ払いの可能性もある。

その場合殴った場合は警察行きだ。

そう思っているところちょうど警察署が見えてきたのでそこにいったん駆け込んだ。

一様この警察署は大きいし銃もある。

避難所まで車も出してくれるかもしれない。

そう思いながら警察署へ行った：

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9616h/>

死の島

2010年10月10日23時06分発行